

内山 靖(総編集)

網本 和, 臼田 滋, 高橋哲也, 淵岡 聡, 間瀬教史(編集)

今日の理学療法指針

評者 鶴見隆正

湘南医療大学リハビリテーション学科長

深みのある藍色の『今日の理学療法指針』を手にしたとき、「とうとうここまで理学療法士界は来たのだ」という感慨を覚えた。なぜなら1966年に全国でわずか183名の理学療法士によってスタートした理学療法士界が、今年で50年という大きな節目を迎えたこの時期に、医学書院の名書シリーズである『今日の治療指針』に、内山靖氏総編集による本書が加わり、これまでの理学療法士界の臨床・教育・研究活動の「来し方」が凝縮され、さらなる理学療法の発展すべき指針が込められているからである。

振り返れば草創期の理学療法士教育は3年制の専門学校で始まったが、現在では98大学、56大学院での教育へと進化し、理学療法士国家試験合格者の累計数は約13万人となり、活動領域は医療から行政、産業保健などに広がっている。また日本理学療法士協会は神経理学療法や運動器理学療法などの7分野の認定・専門理学療法士制度を設けるとともに、日本小児理学療法学会や日本基礎理学療法学会などの12分科学会による臨床研究体制が整っている。

一方、この間の医療情勢は激変し、入院医療の機能分化と医療連携が強化され、施設医療から地域医療へシフトしている。同時に診療ガイドラインや診療の標準化、電子カルテなどのIT化が図られ、質の高い医療体制と地域包括的ケア体制の整備をめざしており、これらに対応した効果的な理学療法が求められている。このような中、病態・障害、評価、治療/介入、リスク管理、経過・予後など一連の理学療法過程を臨床判断の視点で解説し、統一のフローチャートで可視化した『今日の理学療法指針』の刊行は、まさに時宜を得ており意義深い。

米国理学療法士協会では、「理学療法における臨床判断」と題した研修会を1980年10月に開催し、臨床への導入啓発に努めてきたが、広く汎用されるまでには至っていない。その背景には理学療法に関するエビデンスの蓄積不足と理学療法の個性重視

などが根底にあったが、現在では臨床推論の考えと臨床判断を踏まえた理学療法をいかに適応させるかが問われている。その点、本書は、日々の理学療法業務で担当することの多い運動器系疾患、中枢神経系疾患、呼吸循環器系疾患、代謝系疾患などの他に、重症心身障害児や精神疾患、周産期を含むウィメンズ・ヘルス、産業理学療法における健康増進や訪問理学療法などの全16章208項目を取り上げて、病態・障害を細分化し、病期や重症度に対応した臨床判断を基に、最新の標準的アプローチを全てに提示している。これは本書の最大の特徴である。

臨床現場の理学療法士は、限られた分刻みの単位内に、impairmentのみでなく患者・家族の社会参加や活動までを視野に入れた個別性のある理学療法の立案・実施に腐心しているのが現状である。それだけに今回、分担執筆された各専門領域のエキスパート総勢111人の長年の経験則を基盤に、最新のエビデンスを軸にしたサイエンスとアートの融合した臨床力の提示は心強い。各項目には、臨床判断する上でキーポイントとなる文献提示と臨床のコツを織り交ぜており、読者にとって参考になるが、今後、改版される際には臨床判断のクリティカルな情報をさらに増して、臨場感に富む理学療法を思考する書となることを願っている。

『今日の理学療法指針』は、医療最前線から介護老人保健施設や通所リハビリテーションなどで日々、臨床判断を重ねる理学療法士にとって必携必読の書として、また臨床実習に取り組む学生にとっても理学療法過程を理解する上で参考になる良書としてお薦めする。

A5判・562頁・2色刷
 定価：本体5,400円+税
 医学書院刊、2015年